



活字の鋳型(いかた)となる母型。

活版活字100年の 歴史を背負って踏み出す新たな道

株式会社 築地活字



鋳造機を操る職人の大松初行さん。溶解した地金を母型に流し込み、ミリ単位の調整を行いながら活字を生み出していく。

活字の「部屋」と呼ぶ棚には、大小さまざまな書体の活字が収められている。

「文化ですね」と言われると、過去のものともみられたようで、うれしくない。活版印刷にはまだまだ可能性がある。だから、「発展する文化です」と言い返すのだという。

1919(大正8)年創業の築地活字は横浜の地で、金属活字の鋳造を専門に、100年の歴史を刻んできた。社長の平工希(ひろく)さん(62)は5代目。平成に入って、父から家業を継ぎ、オフセット印刷、デジタル化などの荒波にもまれながらも、新事業の開拓、異業種とのコラボなど、知恵を絞って時代を乗り切ってきた。

だがコロナ禍で電話も、ファクスも、メールも激減した時は、さすがに「これまでか」と覚悟した。クラウドファンディング(CF)の勧めも、最初は半信半疑だった。だが、このまま終わるのは悔しい。活版印刷の生き残りをかけて——。CFで思いを訴え、励ましの声とともに、わずか3日で目標額を達成した時、「まだ終わったわけではない」と思えたという。

100年企業はやわではない。会社を訪れると、まずは棚いっぱい積まれた木箱に詰まった金属活字の量に圧倒される。最小のものは4ポイント(1.4ミリ)、糸のように極細だ。

株式会社 築地活字
〒232-0014 神奈川県横浜市南区吉野町5-28-2
電話 045-261-1597 ホームページ <http://tsukiji-katsuji.com/>

活字づくりに欠かせない活字母型は、宋朝体や明朝体など約25万個にのぼるといふ。

その奥には、昭和40年代に製造された6台の鋳造機が並ぶ。400℃の地金を凹型の母型に流し、微妙なずれを調整しながら活字を生み出すのは、この道60年の大松初行さん(77)だ。鋳造職人は全国に4、5人しかいないが、独特の風合いに魅せられたファンは少なくない。「三つの重み」と平工さんは言う。「歴史の重み。手間の重み。質量の重みは手で触れられる、リアルな感覚です」。それが活版の魅力なのだといふ。

CFの返礼は活字セット、鋳造見学や基礎講座など。最終的に目標額の5.5倍に達し、何よりも、自信と誇りを取り戻せたという。技術を未来につなぎたい。100年の重みを背負って、新たな戦いが始まる。

創業1919年 株式会社 築地活字
<http://www.tsukiji-katsuji.com>

活版印刷は存在感のある独特な風合いが特徴だ。



活版印刷を「発展する文化」として継承する代表取締役の平工希(ひろく)さん。

三沢明彦 (みさわあきひこ)

1956年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、1979年読売新聞社入社。社会部記者として活躍し、北海道支社編集部長、写真部長、編集局次長を歴任。その後、旅行読売出版社常務取締役編集長、福岡放送常務取締役(報道、制作担当)、静岡第一テレビ常務取締役(編成、報道、制作担当)。